

フランス精神分析小史

——ラプランシュ『精神分析における生と死』の位置付け

森 茂起

本論は、ある機会に、必要あってフランスにおける精神分析の歴史をたどってまとめた文章に基づいている。当面公にする必要を感じないまま日が経過したが、関心を持ってくださる精神分析専門家にお見せしたところ、貴重な情報が含まれるので何らかの形で活字化する価値があるとの言葉をいただき、ここに掲載することにした。

内容から推察いただけるだろうが、その機会は、ジャン・ラプランシュ(Jean Laplanche (1924-2012))の著書、『精神分析における生と死』^①について考える場であった。わが国においてラプランシュは、『精神分析用語辞典』の著者の一人としてよく知られてきたが、「一般誘惑理論」を代表とする彼のその後

の仕事は十分紹介されてこなかった。また、フランスの精神分析(以下、「フランス精神分析」と呼ぶ)の紹介は、いわゆるラカン派に関するものが圧倒的に多く、全体像の把握は、フランスに留学するなどの経験がなければ困難であった^②。この事情は、日本だけではなく、英語圏においてもほぼ同様と思われる。

以下の記述では、最近ようやく得られるようになった情報^③を参照して、フランスにおける精神分析史を整理した上で、ラプランシュの仕事の位置づけを試みる。

II

フランス精神分析史を考えると、戦後のある時期から、ジャック・ラカン^④の存在が、その前景を支配してきたことは否定できない。しかし、一九五〇年代にラカンをめぐって始まる分析協会の分裂史には前史があることも忘れてはならない。前史の第一は、そもそもジャン・マルタン・シャルコー、ピエール・ジャネの系譜とフロイトの間にあったライバル関係である。「ヒステリー」「催眠」「記憶」「身体」といった問題群を巡ってそのライバル関係は進行していた。ピエール・ジャネの影響下で、またドイツ的なるものへの全般的な拒否感の中で、臨床界がフロイトに目を向けない中、まず関心が広がったのは、

文学者やシュールレアリストたちのサークルであった。それでもフロイトの翻訳は二〇年代まで現れず、フロイトのテクストを詳細に読み込むものは多くなかった。

前史の第二は、第一次大戦後の二〇年代に始まる状況である。大戦や革命による人の移動も作用して、アナリストアナリザンドという系譜関係を軸に精神分析の臨床実践がフランスに導入されていく。そのなかに既に分裂の種とも言える二つの流れがあった。その一方はフロイトに忠実であることを旨とするマリー・ボナパルト⁽⁵⁾、ルドルフ・レーベンシュタイン⁽⁶⁾であり、幼児性欲説、死の欲動、非医師分析家、文化理解への応用といった諸側面でフロイトを正確に受容しようとしていた。

その一方で、幼児性欲概念に代表されるフロイトの教義的側面と距離を置き、精神分析の臨床的方法を「フランス化」して取り入れようとした分析家たちがいた。系譜的には、ポーランド系フランス人、ウージェニー・ソコルニスカ⁽⁷⁾に分析を受けたグループであり、エドゥアール・ピション⁽⁸⁾、ルネ・ラフォルグ⁽⁹⁾そのラフォルグに分析を受けたルネ・アレンデイ⁽¹⁰⁾などである(55, 64)。

このような多様性を内包しながら、一九二六年にパリ精神分析協会(S.P.A.: Société psychanalytique de Paris)が成立し、国際精神分析協会(IPA)に加入する。ラブランシュが生まれ、間もなくのことである。治療現場としては、一般病院や子ど

も治療といった領域に精神分析の実践を導入する先駆的動きが見られた。その頃、ハインツ・ハルトマンに分析を受け病院精神科を實踐現場とするサッシュャ・ナシュト⁽¹¹⁾、高等師範学校の学生であったダニエル・ラガーシュ⁽¹²⁾、そしてヘーゲル哲学やシュールレアリズムに魅了されていたジャック・ラカンなどの第二世代の分析家たちが、のちの活躍の地盤を築きつつあった(64)。

前史の第三は、第二次世界大戦である。ナチスドイツによる占領は、「ユダヤの科学」としての精神分析を地下運動化させた。戦時中の抑圧は、逆にレジスタンス経験の名誉となって戦後の復権を支えた。戦時中に、名高い高等師範学校でバシユール、メルローポンティらに哲学を学んでいたラブランシュはまだ哲学の学徒だったが、やはりレジスタンス運動に参加した。他方で、占領下でドイツ精神療法協会のフランス支部を創立しようとしたラフォルグによる動きもあった。ナチス政権においてドイツ軍国家元帥も務めたヘルマン・ゲーリングの従兄弟、マチアス・ゲーリングを会長とする協会である。このラフォルグの振る舞いは、彼に分析を受けた分析家たちの立場を戦後難しくした。ルネ・アレンデイ、ジョルジュ・モーク⁽¹³⁾、アンドレ・ベルジュ⁽¹⁴⁾、ジュリエット・ブートニエ⁽¹⁵⁾らに加え、わが国でよく知られている分析家としてはフランソワーズ・ドルト⁽¹⁶⁾がこのグループに属する。彼らが、一九五三年

の協会分裂時に脱退側に入ったことには、戦争が残した影も関与していた。

前史の第四は、アメリカとソビエトの覇権を争う冷戦である。戦後、精神分析は、ヨーロッパ大陸からの亡命分析家たちの活躍に支えられ、英米を中心とする英語圏で発展する。この精神分析の「アメリカ化」が、フランス精神分析に錯綜をもたらすセルジュ・レボヴィシ⁽¹⁷⁾、ジャン・ケステンバーク⁽¹⁸⁾、エヴリン・ケステンバーク⁽¹⁹⁾など、後に分析家としてよく知られるようになる精神科医たちが、大戦中のレジスタンス運動に関わったフランス共産党の党員であったからである。ヨーロッパ各国の共産党を束ねるためにソ連が組織したコミンフォルムに従って、フランス共産党がアメリカ資本主義を攻撃した際、フランスの雑誌が、精神分析は階級闘争を無力化することを目指しているとして、ドルやココアと結びつけて攻撃する記事を掲載した。彼らはその署名記事に名を連ねたのである。彼らはしばらく後に共産党を離れ、記事への署名を取り下げたのだが、この事件の余波は長く続くことになる。

他方で、イギリスにおける展開がフランスに紹介されて行った。ラガーシュ、あるいは若い世代に属するレボヴィシ、モリス・ブヴェ⁽²⁰⁾などが、アンナ・フロイト、クライン、ウイニコットの仕事に注目し、パリに招いた。ウイニコットがフランス精神分析界に及ぼした影響は特に大きかった。

およそ以上のような背景のもとで、五〇年代始めから、ラカンが「フロイトへの回帰」の言葉を掲げて自我心理学への攻撃を強める。戦後ラカンの下で精神分析を学び始めたラプランシュは、まさにその渦中にあった。ラカンをめぐるこれ以降の歴史は他書に譲るが、攻撃を突き動かすラカンの反アメリカ感情、レーベンシュタインへの転移を別にしても、今まで述べたような政治的背景と、「カウチからカウチへ」⁽²¹⁾と連鎖する転移関係を孕むアナリスト・アナリザンドの系譜が、紐帯という意味でも拒絶という意味でも錯綜の背景にあった。戦時中にアメリカに亡命して自我心理学の中心人物となったレーヴェンシュタインを、同じ分析を受けた立場でありながら、ラカンは激しく攻撃し、ナシユトはフランスにおける自我心理学を担って論陣を張った。

ラカンは、分析セッションの時間制限、あるいは非医師分析家の受容による対立から、またSPPを支配するナシユトとの対立関係から、一九五三年にSPPを離れた。ラカンに受けた分析を起点として分析家、そして医師となっていたラプランシュは、多くの分析家とともにラカンに従い、新たに設立されたフランス精神分析協会(SFPF: Société française de psychanalyse)に加わる。しかし、国際学会であるIPAが、ラカンの実践を理由にSFPFの登録を認めないことが明確となった一九六三年、SFPFは解体し、ラカンは新たにパリ・フロイト学

派 (EFP : Ecole freudienne de Paris) を組織した。このときラランシュは、IPAへの所属を重視し、ブートニエ、ラガーシュ、ディティエ・アンジュ⁽²²⁾、ジャン＝ベルトラン・ポントリス⁽²³⁾らとともに、ラカンのグループを離れIPAの基準を満たす新たなフランス精神分析協会 (APF : Association psychanalytique de France) を設立する⁽²⁴⁾。こうしてラランシュは、ラカン派に属さない、IPAに属する分析家と違った。ラランシュが四〇歳になる年だった。

彼は、フロイトを徹底的に読む作業に取り組み、各国語に訳され現在も参照され続ける『精神分析用語辞典』を生み出し、その三年後には、主著とみなされる『精神分析における生と死』を発表した。

III

以上の歴史的背景のもとで、『精神分析における生と死』は、『辞典』と共に、早い時期に英語圏に紹介され、ラカンとは別の文脈でフランス精神分析を伝える重要な役割を果たした。英語圏においても我が国同様フランス精神分析の全体が伝えられないなかで、本書およびのちのラランシュの著作は、ラカン以外のフランス精神分析を代表する仕事とみなされてきた。

実際、フランス精神分析の全体を特徴付ける傾向の多くが、

ラランシュに見られる。基本的志向として、経験科学的方向に舵を切ったイギリスとの対照をなす哲学との紐帯の強さがある。鍵概念として「他者」「事後性」「性」「欲動」「エディプス」が中心的な役割を演じる。これらのいずれもが、ラカンの影響下での、しかしラカンとは違った形による「フロイトへの回帰」によって扱われる。特に初期フロイトと、精神分析から当時排除されていたフェレンツィの外傷論を見直しながら、「他者」「事後性」の意味に着目し、性の発現における(エディプスコンプレックスを既に自身の中に持ちながら、エディプスの関係を構成する)保護者という他者の関わりを明らかにする。

ラカンが初めて注目した「事後性 Nachträglichkeit, apres coup」は、ストレイチーによる deferred action (直訳すれば「延ばされた作用」という必ずしも適切ではない訳と、文脈による訳し分け、そしてフロイト自身の使用の変遷によって、英語圏では分析概念として確立していなかった用語である。ラランシュは、フロイトが提示する事例に即しながら、出来事の事後的な再解釈による性的意味の付与としてそれを理解し、その種の出来事の範囲を乳児期の母子間の関わりにまで拡張する後に展開される「一般誘惑理論」の萌芽である。ラカンと異なり、個別具体的な経験の作用に光を当てながら、その作用を「事後性」によって理解する。他方で、フェレンツィを参照しながらも、フェレンツィが晩年に注目した特異的、外傷的な事

象としてではなく、私たちすべての性の起源に常に既に存在する基本的契機としてそれを位置付ける。

「性」はもちろん精神分析の発展を導いてきた主題だが、人生最初期の母子関係への注目と、対象関係論における「取り入れ」「分裂」「投影」といった精神分析概念の発展の中で、「セクシュアリティ」「性差」「生殖器」などが精神分析の議論の中心から退いていった歴史がある。フランス精神分析の特徴の一つは、その中であって「性」にまつわるこれらの問題群を論じて続けてきたことにある⁽²⁵⁾。「セクシュアリティはフランス精神分析において重要な位置を占め、おそらくそのアイデンティティの一部でさえある⁽²⁶⁾」のである。その視点からして、ラプランシュは特異な位置を占めている。つまり、性理論の吟味や「一般誘惑理論」の展開でそのアイデンティティの一面を占めるようでありながら、アンドレ・グリーン⁽²⁷⁾が述べるように、性をエスと身体から切り離れた点では、精神分析の脱性化を促進したからである⁽²⁸⁾。

「欲動」はまさにラプランシュの関心の中心を占める主題であり、またフランス精神分析の議論を支配してきた主題である。対象関係に視点を移した英語圏に比べ、その重視においてフランスの分析家たちは際立っており、ラプランシュもまたその一人である。生物学的なものからの離脱というラカンの運動と身体に埋め込まれた欲動の重視という非ラカンの運動の両者の間

の緊張のなかにフランス精神分析があることを考えれば、ラプランシュはまさにその緊張を体現し、実際その基本的枠組みを提供した分析家である。

そして「死の欲動」である。『精神分析における生と死』においてラプランシュが最後に辿り着く「死の欲動」——その受容に関して議論が別れるフロイト後期の概念——の受容の仕方もまた、フランス精神分析を性格づける点である。英語圏と同様、フランスにおいてもこの概念の受容・拒否については二分してきたが、一つの特徴は、大戦を経た反復強迫の観察に基づいて「快感原則の彼岸」で新たに導入された概念としてではなく、フロイト初期の仕事に見られる「ゼロ原理」にその起源を見るとところにラプランシュの特徴がある。欲動には必ず表象が伴うと考えるイギリス対象関係論と、欲動が表象や空想と結びつき、ついには言葉と結びつくというプロセスを考えるフランスの違いがここにある。

IV

以上、ラプランシュの精神分析理論の性格を表すいくつかの主題を指摘してみた。それらの全てがラカンの影響下にあるという意味で、彼の仕事もまたラカンとの関係の下にある。独創的なフロイトの読解を展開するラカンに対して、ラプランシュ

は、やはりフロイトに回帰し、フロイトを徹底的に読むことでラカンとの差異化を図ったと言える。その事情は他の多くのフランス分析家たちも共有している。その意味で、『精神分析における生と死』は、以後のフランス精神分析の基盤を築いたのである。同様の主題を扱う論者たちが常にその書を踏まえて論を展開していることは言うまでもない⁽²⁰⁾。また、英米の精神分析界が関係論に大きく軸を移しているいま欲動論を見直すことは、「生と死」を考慮するための視角を提供する。これ以上の考察は他所に譲りたいが、「生と死」の精神分析的理解は今後さらにその重要性を増すのではないかと想像する。

「セクシュアリティ」に関してはどうか、フロイトの古典的な理解——時代とフロイトの視野の限界を伴うそれ——に始まる「性差」の議論はすでに過去のものとなったかもしれないが、「性差」が脱構築されつつある今、これもまたきわめて現代的な主題である。「誘惑」も、親のコンプレックスが子育てに及ぼす作用も、子ども虐待の問題を通して問われ続ける主題である。ラプランシュの精密な議論は、それをどのように受け止めるかは論者によって異なっても、一つの参照軸として今後も機能し続けるに違いない。

註

- (1) Jean Laplanche, *Vie et mort en psychanalyse (Life and Death in Psychoanalysis)*, Paris, Flammarion, 1970. 『精神分析における生と死』 十川幸司・堀川聡司・佐藤朋子訳、金剛出版、二〇一八。
- (2) 多くの著作が翻訳されている分析家としては、ラカンとドルトにとどまるが、少なくとも一冊の著作が紹介されている分析家となると、実はかなりの数に上る。以下に登場する分析家の著作に日本語訳が存在する場合、注に示すことにする。
- (3) フランス精神分析に関わる本稿の記述は、主として次の文献による。まず、日本語で読める簡にして要を得た次の解説である。立木康介「序説」、立木康介編著『精神分析の名著』中央公論新社、二〇一二、三―六八。もう一冊は、次の論文集である。D. Birksted-Breen, S. Flanders, & A. Gibault (eds.) *Reading French Psychoanalysis*, Routledge, 2010. これは、国際精神分析学会に属するフランス精神分析の全体像を英語圏に紹介すべく編まれたものであり、フランスの事情をフランス外から把握することを可能にしている。引用箇所を個々に示すことはしないが、特に、編者による「序」、およびAlain de Mijollaによる第一章「フランスにおける精神分析史の諸特徴」を大幅に参照したことを記しておく。フランス精神分析を特徴付ける主題群については前者、初期から戦後にかけての歴史については後者によるところが大きい。
- (4) Jacques Lacan (1901-1981) 『人格との関係からみたパラノイア

- 性精神病』朝日出版社、一九八七、『エクリ』1、2、3、弘文堂、一九七二・一九八一、『フロイトの技法論』岩波書店、一九九一、他。
- (5) Marie Bonaparte (1882-1962) ナポレオン家の血筋を引き、ギリシャ・ベルギー王家に嫁いで、プリンス・ボナパルトとも呼ばれる。フロイトに分析を受け、フロイトから絶大な信頼を得、のちにはフロイトのイギリス亡命に多大な支援を行った。また、フロイトのフランス語訳を勢力的に行った。『クロノス・エロス・タナトス』せりか書房、一九九二、『女性と性…その精神分析的考察』弘文堂、一九七〇、『精神分析と文化論』弘文堂、一九七一。
- (6) Rudolph Loewenstein (1898-1976) ポーランドに生まれ、チュウリヒでオイゲン・ブローラーの元で学んだ後、ベルリンでハンス・ザックスに分析を受けた。フロイトの指示でフランスに移住し、ラカンやラガーシュをはじめ、多くの第二世代の分析家たちの分析を行った。第二次対戦中にアメリカに移り、いわゆる自己心理学の重要な論者として活躍した。
- (7) Eugène Sokolnicka (1884-1934) フルシャワに生まれ、フランスで精神医学を学び、第一次大戦前にフロイトに、大戦後にはフェレンツイに分析を受けた。子ども分析の先駆者としても知られる。
- (8) Edouard Pichon (1890-1940)
- (9) René Laforgue (1894-1962)
- (10) René Allendy (1889-1942)
- (11) Sacha Nacht (1901-1977) 『マソヒズム…被虐症の精神分析』(著者名表記、サーシャ・ナクト) 同朋舎、一九八八。
- (12) Daniel Lagache (1903-1972) 『精神分析の理論と実際』白水社、一九五七。
- (13) Georges Mauco (1899-1988) 『独身のすべて…その心と身体の分析』勁草書房、一九七九。
- (14) André Berge (1902-1995) 『難しい子の理解と教育』ぎょうせい、一九七七。
- (15) Juliette Favez-Boutoulier (1903-1994) 『精神分析とは何か』中央出版社、一九七四。
- (16) Françoise Dolto (1908-1988)
- (17) Serge Lebovici (1915-2000) 「幻想的相互作用」『Imago ヒトの意識の誕生』青土社、一九九六、一月号。
- (18) Jean Kestenberg (1912-1975)
- (19) Evelyne Kestenberg (1918-1989)
- (20) Maurice Bouvet (1911-1960)
- (21) Alain de Mijolla の言葉。前注注(3)
- (22) Didier Anzieu (1923-1999) 『分析的心理劇』牧書店、一九六五、『集団と無意識…集団の想像界』言叢社、一九九九。
- (23) Jean-Bertrand Pontalis (1924-) 『魅きつける力…夢 転移言葉』みすず書房、一九九三。
- (24) その後も分裂を繰り返したラカン派グループと異なり、APFは現在に至るまでIPAに所属する団体として活動を続けている。
- (25) この性格を示す翻訳書として、先のボナパルトの著書の他に次の

ものがある。Mustapha Safouan (1921) 『女性のセクシュアリ
ティ』弘文堂、一九八二。

- (26) Roussillon, Sexualization and Femininity. *Reading French Psychoanalysis*, chapter 28.

- (27) André Green (1927) 『フランス精神分析における境界性の問
題：フロイトのメタサイコロジーの再考を通して』（編著）清和
書店、二〇一五。この議論に関しては次の文献を参照。André
Green, *The Chains of Eros*, 2001

- (28) 他方で、「身体的なるもの」への注目は、フランス精神分析を特
徴づけるもう一つの領域である。ドルトの「身体的象徴」理論は
その例である。

- (29) たとえば次の書。セルジュ・ルクレール (Serge Leclaire, 1924-
1994) 著 『子どもが殺される：一次ナルシズムと死の欲動』誠
信書房、一九九八。ルクレールには次の翻訳書もある。『精神分
析すること…無意識の秩序と文字の実戦についての試論』誠信書
房、二〇〇六。